

# 平成元年度定例講演会講演要旨（4月）

## 1. 花粉と植生

星野フサ

花粉の化石なんて聞いたことないとおっしゃる方も多いと思いますが、貴重な時間をお借りして少しお話できたのはとても幸運でした。あの日は娘のピアノの発表会とだぶっていたものでそそくさと帰ってしまったりしてすみませんでした。

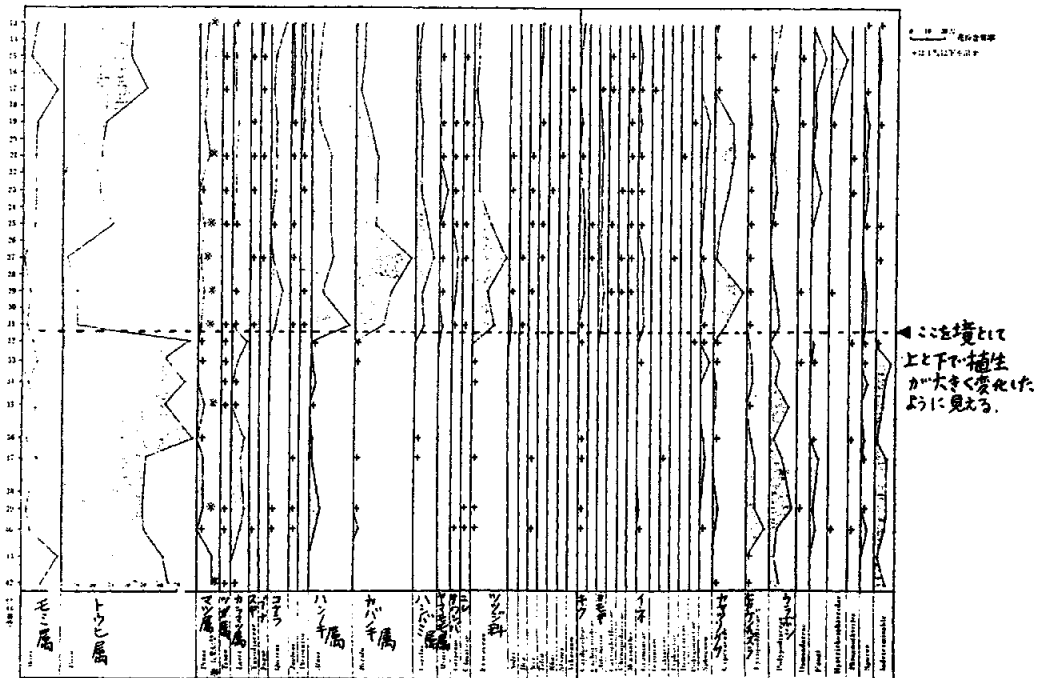
最近自然保護の運動が活発で開発しないでそのまま残そうとする動きがとても強い風潮にあります。昨秋テレビでブータンの植物の紹介がNHKで放映されました。ローソクのように林立する変わった植物の紹介とその保護のことも述べられ、胸を打たれました。私の郷里の中小屋も幼少の頃にあっためずらしい植物は私の知らぬ間に殆どなくなり、ガッカリしているこの怒りをどこにぶつけたらよいのか……？

前回もちょっと書いたと思うのですが、植物を保護する立場と春先に山菜を食べることとのバランスを誰がどのように庶民に知らせて行くのが、

むずかしいところだとつくづく思うのです。滅びてしまわない程度に自然植生を残すことが庶民にどれ位できるのか？庶民にできないことだとすると誰がそのことを教育していくのか指導するのかということが問題になると思います。

実際問題として、中小屋の湿原に咲き乱れていた花々が全てなくなって水田や畑になってしまった部分を、帰省した時見ると幼少の頃それをいつも見ていた人間にとって、ひどく残念だと思うのは私だけではないと思います。ところが、この湿原の表層に穴をあけて地面の部分から深いところまで、どのように含まれている化石が変化しているかを調べてみると人が開発するより古い時代に植生が自然に変化していつていることがわかったのです。

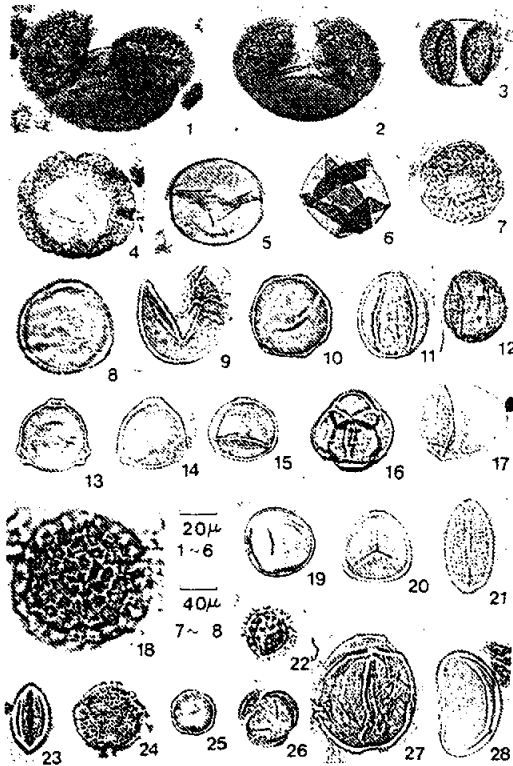
第1図の試料番号が大きい方が古くて、上にいくほど新しいのです。このデータは北広島島の砂利採取場のあたりで入手したもので40万年位前とかの中国ではシナントロプスやビテカントロプスがいたところとかの古い時代のものなのです。この付近の自然植生が時代がたつにつれて変わっていること。



第1図 北広島砂利採取場の近くの露頭から得られた花粉胞子(大江1972)

試料番号32と31の間での急激な植生の変化は、ここで土地の隆起浸蝕があったので途中のものがけずられてなくなってしまったことによるのです。このことは1970年ころにはわかっていませんでした。また、この図から自然植生を自然に変化して行くのにさからって保護することのむずかしさがよくわかると思います。

第2図には、栗山付近の第4系から産出した花粉胞子の写真を示しておきました。

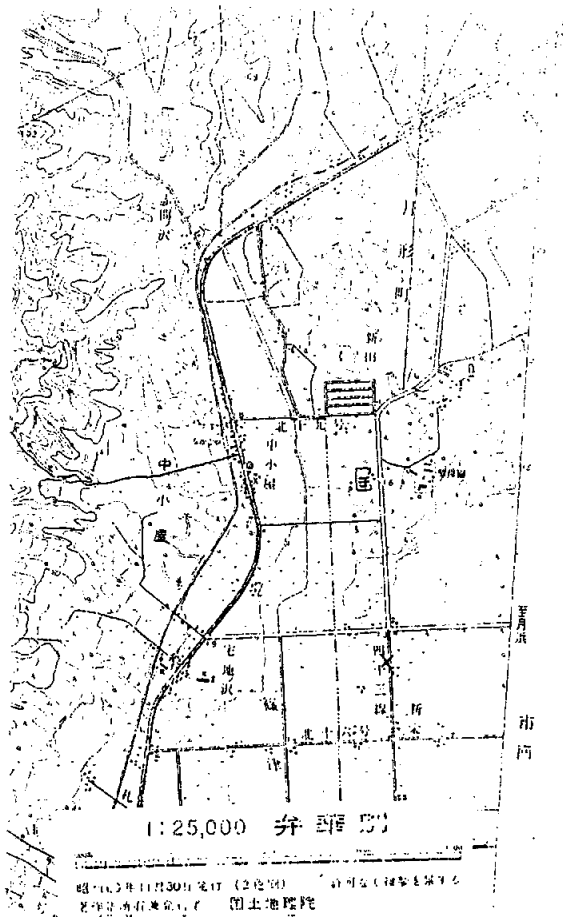


第2図 化石花粉(栗山町の第4系)〈星野・伊藤・矢野 1986〉

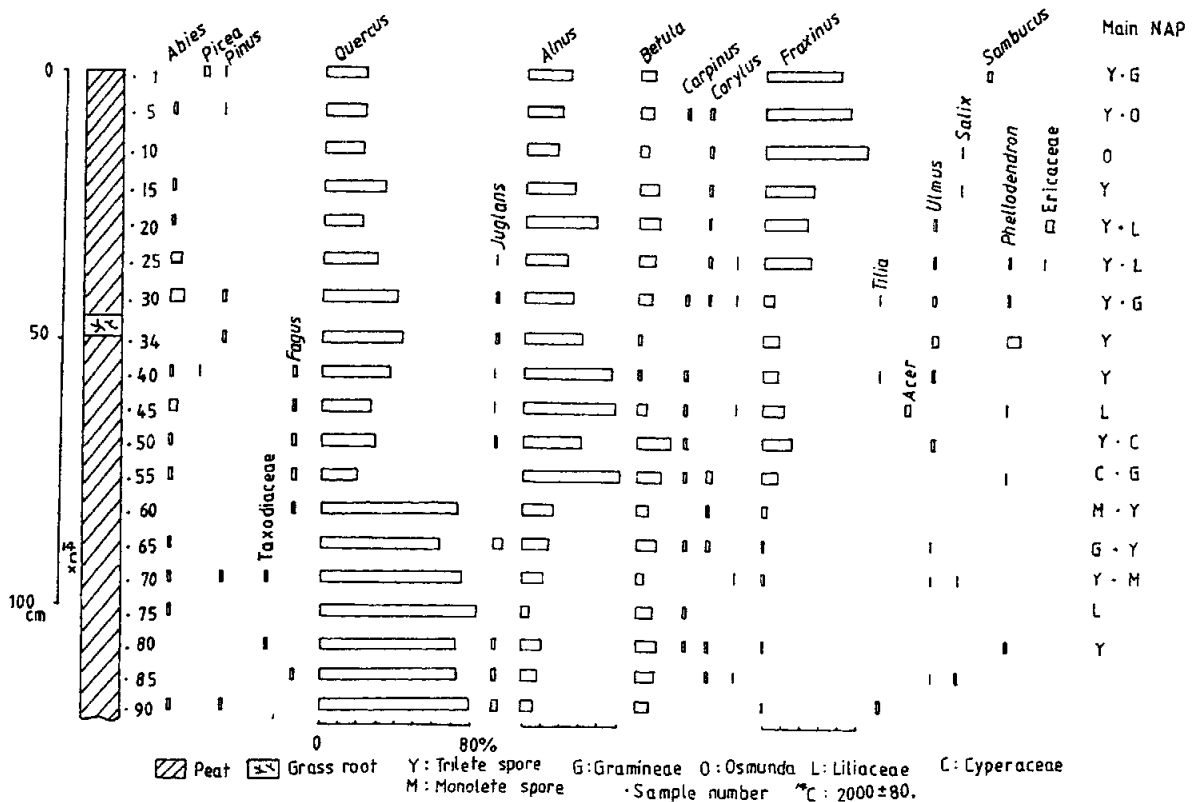
図版	説明	10	<i>Juglans</i>	20	<i>Sphagnum</i>
1	<i>Abies</i>	11	<i>Quercus</i>	21	<i>Lysichiton</i>
2	<i>Picea</i>	12	<i>Quercus</i>	22	<i>Carduoideae</i>
3	<i>Pinus Haploxyton</i>	13	<i>Betula</i>	23	<i>Salix</i>
4	<i>Tsuga</i>	14	<i>Myrica</i>	24	<i>Ligustrum</i>
5	<i>Larix</i>	15	<i>Carpinus</i>	25	<i>Thalictrum</i>
6	<b>Spore</b>	16	Ericaceae	26	<i>Artemisia</i>
7	<i>Ulmus</i>	17	Cyperaceae	27	<i>Menyanthes</i>
8	<i>Fagus</i>	18	<i>Persicaria</i>	28	単条型 Spore
9	<i>Cryptomeria</i>	19	Gramineae		

第4図に示したのは植物友の会の講演の時に少し話していた月形町南新田の水田排水溝から得られた花粉ダイアグラムです。試料採取地点を第3図に示しておきました。

試料番号60~90は*Quercus*コナラ亜属が優勢で針葉樹は殆どみられません。試料番号65と70の間の<sup>14</sup>C年代は2000±80 (1950年よりの年数) 50B.C. (Gak-14237) であり、この年代からみて、キリストが生きていたころ?の月形町の周辺植生を示していると考えられます。



第3図 篠津原野西縁部、月形町南新田の水田排水溝における花粉分析試料採取位置(×印)



第4図 月形町南新田水田排水溝の花粉ダイアグラム

試料番号30~55は *Alnus* ハンノキ属が多く次に多いのは *Quercus* コナラ亜属であり、少量の *Fagus* ブナ属花粉が産出しています。

試料番号1~25は *Fraxinus* トネリコ属が優勢で *Quercus* コナラ亜属と *Alnus* ハンノキ属が目立ちます。

以上の花粉変遷からみて気候的には現在とはほぼ同じと考えられますが詳細は別に報告します。

わかりにくいことを書いてしまいましたが、このようなことを考えている私にとりまして植物友の会の会合は本当に意義深いものなのです。巡検の葉書を出されたりその都度案内される原先生・日野間さん・伊藤先生には本当に感謝しており

ます。

引用文献 星野フサ・伊藤浩司・矢野牧夫(1986): 石狩低地帯における最終氷期前半期の古環境。北海道開拓記念館研究年報 第14号, p13-30.

大江フサ(1972), 北海道野幌丘陵南部における洪積統の花粉分析—とくに西の里層について—地球化学, 25巻6号, p.245~250.